

「家がいいね」 第92号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2012. 1. 6

「絆」が昨年を最も表す漢字だそうです。地域の助け合う力が強固だった東北ならではの言葉だと思います。震災におびえて支離滅裂だったのは東京です。帰宅難民や風評。パニックは、職場と自宅の距離が伸びきり地域の力も衰えた都市化日本の象徴でした。私達が「何かをしなれば」と焦るのは、利便と引換えに壊してきた「絆」に気が付き、後悔も加わっているためではないでしょうか。さて私は新年の初めに、10代の初心の気持ちで読んだ、岩波ジュニア新書2冊に大感激でした。

「正しいパンツのたたみ方」はあるのか？

答えは、幾つもあります。でも私が正しいと言っているなら、互いの生活観の折り合いを忘れていませんか？



と云う著者は途中から家庭科に専攻を替えた男性教師。自分の暮らしを自分で整える「生活力」を高校の家庭科で教えます。弁当作りで、家族との関係に気付かせ、じゃあ家族って誰の事？と考えさせる授業です。働くってどんな事？の授業の中では、読者＝高校生役の私が目からウロコでした。

労働の価値は、得られる収入だけでなく、労働そのものの中（社会貢献）にある。ところが今や「労働は働いて収入を得る個人的行為」で「働く働かないは自己責任」と刷り込まれる世の中です。

社会が適切な労働環境を準備せず、それどころか低賃金・長時間労働を自己責任と、若者に強いるワーキングプアは、社会的無責任体制なのかと気付きました。そのツケ、過労死や自殺の増加として社会全体に回されます。原発政策の資金が、利用料金として薄く広く取られていた構造に似ていますね。消費税も同じ構造で利用されそうです。この本はさらに一人で生きにくい問題やDVにも話題が広がり、大人こそ読むべきかと思えます。



大晦日に息災を願って外宮での餅焼き風景（実は娘の撮影です）

プラ子のアフリカボランティア日記

外見で若い人を判断してはいけませんね。渋谷のギャル店長として働いた後に、世界に放浪旅行に出た20代の娘さんが、アフリカの医療施設



を手伝う日記を読んだの感想です。貧困が若い女性に、エイズ・末期がんとしてシワ寄せされ、治療もままならない状況で、病気の苦しみ以上に孤独が襲います。日本に帰らずに6年余、彼女は女性たちに寄り添うことを第一に時を過ごしています。当然に多くの最期を看取ることにもなっています。医療者でない素人の彼女の感じ方に、ホスピスケア関係者の方が逆に教えられる事が多々あります。日本を出て自分の考え方が大きく変わったことに彼女も驚いています。自分のためだけにお金を稼ぐ事から、社会との関わりを考えながら働く事への大転換です。彼女の援助活動も相手の自立を引き出すことに心を砕いているなあと感心します。（プラ子＝栗山さやかさんに尊敬をこめて紹介）
最新のブログが「プラ子」検索で開きますよ！

2月19日 日赤市民公開講座（無料）

後半（15時～16時）を担当の予定です。
「がんでも 家に居ていいんです！ 在宅ケアのすすめ」という題でお話しようかと考え中です。



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
ホームページ <http://isezaitaku.com>